

寅さん歩 その14

東京に こんなところ-14

平野 武宏

首都東京は徳川幕府の江戸から明治維新へ、そして関東大震災・太平洋戦争の被災で壊滅から復興、1964年（昭和39年）の東京オリンピックによる街並み・交通網の再整備と時代と共にその姿を変えています。そして2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、更に近代的な姿に生まれ変わろうとしています。

「寅さん歩」で東京を歩き回っている寅次郎は「東京に こんなところもあるのだ！」と思わせる場所に出会い、感動しています。新シリーズとして取り上げ、紹介します。都民暦約5年の「寅次郎基準」で選んでおりますので、ご容赦下さい。最寄り駅は代表例です。

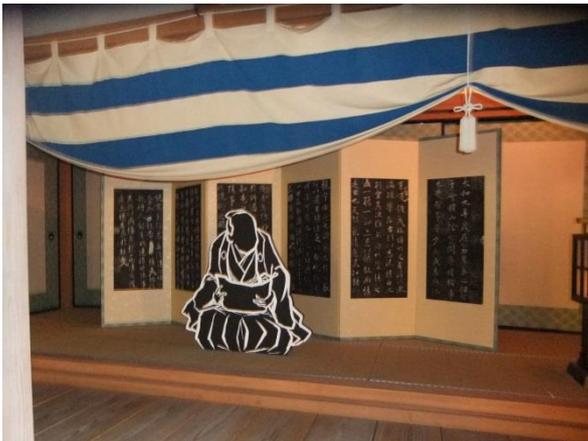
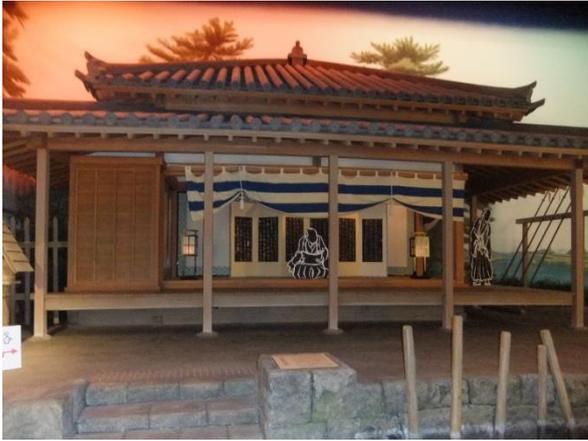
～ 中川船番所資料館 ～

江東区大島 9-1-15 最寄駅 新宿線 東大島駅大島口

中川船番所資料館（観覧料 200 円）は大島口の前の小松川公園（わんさか広場）の先にありました。東大島駅は旧中川の上にホームがあるため、改札出口を間違えると川をまたぎ、遠回りとなります。大島は深川に同じ名があるため、ここは「おおじま」と濁った読み方をすると知りました。

この地は「江戸名所図会」や各種の江戸図から、中川番所跡地と推定され、平成7年（1995年）に発掘調査も行われています。





入館し、番所前に立つと、「どこの誰だ？荷はなにか？」とお役人の声がテープで流れました。

番所建物前の説明板には「中川番所は中川関所とも呼ばれ、河川交通路上における江戸への出入り口に設けられた関所です。

小名木川が中川に流入する中川口の北岸の小名木村に設置されていました。中川対岸の船堀川から江戸川・利根川水系へとつながり、江戸と関東各地、さらには信越・東北方面を結ぶ流通網の要として、ここを通過する船に積まれている荷物と人を改めました。江戸時代中期以降、江戸へ運ばれる品目と数量を把握する機能も担うようになり、海上交通路における浦賀番所(横須賀市)と並び、江戸の東側窓口として重要な機能を果たしました。

この番所の建物は平成7年(1995年)に行われた発掘調査と江戸時代後期に書かれた絵画資料に基づき再現したものです」と記載。

千葉県から船堀川、小名木川の水路は日本橋などの江戸の中心まで「行徳の塩」が運ばれ、「塩の道」と呼ばれました。

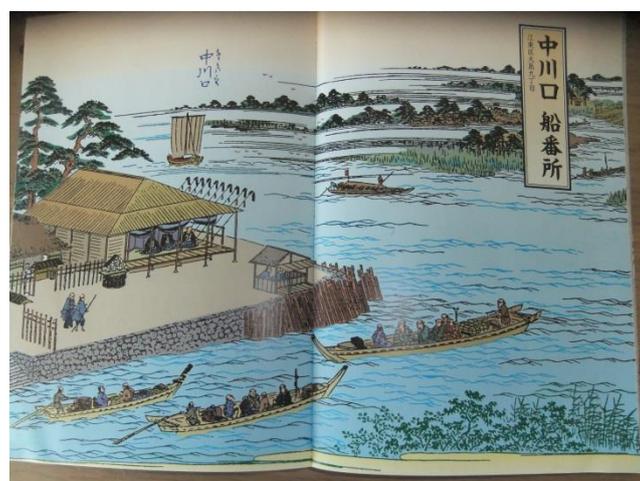
徳川家康は入府すぐに江戸城周辺の埋め立て・水路(運河)整備に着手しています。小名木川は徳川家康が入府と同時に小名木四郎兵衛に命じて開削させた人工河川で、運河の先駆けです。

又、江戸城の前の海「日比谷湊」を「神田駿河台」の山を削り、埋め立てたと知り、「タヌキおやじ」と評価していた家康を見直した寅次郎でした。

写真下は資料館の上から見た旧中川風景です。写真下右の白い建物の先が小名木川入口です。奥に見える橋は平成橋です。



写真下左は再現された小名木川の「塩の道」で、前方が旧中川との合流地点です。現在、小名木川沿いは散策路となっています。旧中川とは荒川放水路の開削により中川と分断された川です。荒川ロックゲートから再び荒川に合流しています。荒川ロックゲートは次々回で紹介します。写真下右は歌川広重 名所江戸百景 中川口 船番所（色つき再現版）です。



[こぼれ話]地下鉄の電車はどこから入れたの？

中川船番所資料館前の小松川公園（わんさか広場）にウォーキング例会で朝、集合した時に隣にある都営地下鉄新宿線の車両基地で、運良く

地下鉄車両の搬入を見る機会がありました。

昔聞いた、春日三球・照代の夫婦漫才で「地下鉄の電車はどこから入れたの？それを考えると一晩中寝られないの。」のギャグを思い出し、急いでシャッターを切りました。

クレーンで釣り上げられた車両は、地下につながる線路に降ろされ、地下に入っていきます。



写真左の車両の下には地下につながる線路がありますが、中には入れず、見えませんでした。

春日三球・照代さんに見せてあげたい光景でした。

「寅さん歩」の話題は街に転がっているなと感じた寅次郎でした。

次回は 東京の桜 2017 です。

平野 寅次郎 拝